

論文

『アリス』のパラドクス解釈の試み

——マクタガートとドゥルーズの時間論を中心に——

角 田 あさな*

序

『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) (以下、『不思議の国』とする)、および『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, 1871) (以下、『鏡の国』とし、これら2作品をまとめて『アリス』とする)は、論理学者であったルイス・キャロル (Lewis Carroll, 本名 Charles Lutwidge Dodgson, 1832-1898) のことば遊びがいたるところにちりばめられた作品で、「ノンセンス文学」の筆頭とされる¹。『アリス』のことば遊び全般としてのノンセンスの中には、重要な問題を含むパラドクスが潜んでいる。その1つとして、帽子屋と三月ウサギの止まった時間のパラドクスがある。哲学において、時間のパラドクスは古代から多くの議論がなされてきた。なかでも、ゼノンの3つのパラドクス (飛ぶ矢のパラドクス、分割のパラドクス、アキレスと亀のパラドクス) などは有名である。近代における議論としては、マクタガート (J. M. E. McTaggart, 1866-1925) が時間の非実在性を証明しようとしたこと (『時間の非実在性』1908) で知られる。帽子屋と三月ウサギのパラドクスは、そうした論理学的問題を含んでいるのだと考えられる。また、帽子屋と三月ウサギについては、キャロル作品を扱った『意味の論理学』(1969)においてドゥルーズ (G. Deleuze, 1925-1995) もパラドクスとして挙げている。しかしながら、そうした『アリス』のパラドクスを重視して論じる研究は少なく、多くは数あるノンセンスのうちの1つとしてパラドクスを扱うばかりである。論理学者としてのキャロルに注目した宗宮は、『アリス』をキャロルが論理学の理論世界と現実世界との齟齬に悩み、論理の限界を提示した作品として読む²。ワンダーランドの住人はキャロルの論理学的理論を代弁し、物語の主人公であるアリスがキャロルの直観と常識を代弁するキャラクターとして解される。宗宮は『アリス』のノンセンスを4種に分類する。それらは、概念が欠如しているために単語の意味が通じないもの (キャロルの「カバン語」など)、意味するが現実を指示しないもの、自己言及による無限退行、会話の規則をくつがえすものである³。宗宮の関心は言語の意味作用的なものに重点が置かれ、論理のパラドクスは重視されていない。本稿では論理のパラドクスを重視して論じたい。

そこで、本稿では、『アリス』における帽子屋と三月ウサギの時間のパラドクスを、マクタガートとドゥルーズという異なる2つの時間論から読み解こうとする。止まった時間のパラドクス = 「狂気」を体現する帽子屋と三月ウサギの存在が何を指すのか、そのパラドクスの構造を知るための手がかりとして、マクタガートとドゥルーズの時間論の検討を用いる。

1. 『アリス』におけるパラドクス

『アリス』は、アリスがウサギ穴に落ちて、あるいは鏡を通り抜けてワンダーランド (不思議の国) に迷い込み、多種多様なキャラクターたちに出会うという以上の物語 = ストーリーと呼べるようなストーリーの存在しない、奇

キーワード：アリス、パラドクス、時間論、マクタガート、ドゥルーズ

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2009年度入学 表象領域

妙な「物語」である。また、それは児童文学でありながら、哲学的な問題を数多く含み、哲学者や論理学者を悩ませてきた作品でもある。このような『アリス』が提示する問題には、様々なパラドクスが含まれる。例えば『不思議の国』のチェシャ・ネコは「ネコなしのにやにや笑い」をする⁴。また『鏡の国』のトゥードルディーは、自分自身を雨傘の中にたたみこもうとして失敗する⁵。もちろん、たたもうとする行為者（主語）は、同時にたたまれるもの（述語）にはなれない。ここには、主語と述語の混同によるパラドクスがみられる。別の例として、『鏡の国』のハンプティ・ダンプティは固有名詞と普通名詞の見分けがつかず、個体を認識することができない⁶。さらに、トゥードルダムとトゥードルディーはアリスを含むすべては赤の王の夢の中のものごとには過ぎないと言う⁷。ここには、夢を見ているアリスとその夢を見ている赤の王、さらにそれを夢見るアリス……という無限退行のパラドクスがあり、結局アリスにも読者にもどちらの夢であるのかがわからない。

こうした様々なパラドクスの中、私たちがこれから注目するものは、帽子屋と三月ウサギをめぐるパラドクスである。帽子屋と三月ウサギは、『アリス』において主人公であるアリスを除き、唯一『不思議の国』と『鏡の国』の双方に登場する特殊なキャラクターである⁸。彼らはワンダーランドの「不思議な」住人たちの中で、「狂気 (mad)」の代名詞として、換言すれば止まった時間のパラドクスそのものを体現するものとして登場する⁹。彼らの狂気は、ハートの女王に「時間を殺している (murder the time)」といわれたことを契機とする¹⁰。そもそもそのことば“murder the time”は、帽子屋が唄った歌¹¹に対して、女王が「調子が外れている」「(作品を) 台無しにする」という意味の慣用語として発したものである。しかしながら、それは帽子屋にとって字義どおりのものとなり、彼は「時間を殺す=時間を止める」こととなる。また、その出来事は3月のことであり、発情期である3月に狂ったようになるウサギの様子からその存在を名づけられた三月ウサギは、帽子屋と同時に狂うこととなる。それ以来、彼らは常にティー・タイムという時間にいるのである。ただし、彼らの時間はことば上、ティー・タイムで止まっているとしても、そのティー・タイムの中で彼らはテーブルに並べられた茶器からお茶をのみ、パンを食べて、テーブルをまわりながらパーティを開きつづける。それは「狂気のティー・パーティ (A Mad Tea-Party)」と呼べるものである。つまり、彼らは止まった時間の中で動いているのである。ここに時間のパラドクスが生じる。

だが、以上の帽子屋と三月ウサギをめぐるパラドクスにおいて、ただちに以下の2つの疑問が生じる。ひとつは、ティー・パーティにおける「時間が止まっている」とはどういうことか、さらに言うならば、時間のパラドクスとは何か、ということである。そこにはたんにことばで「時間が止まっている」というだけではない、論理によって止められた時間があるのではないかと考えられる。もうひとつは、止まった時間の上で動いている帽子屋と三月ウサギとは、すなわち「狂気」とは、何であるのか。彼らの特権的地位はどうして与えられるのか、ということである。私たちは、以上の2つの疑問を続く第2節、第3節で考察することにする。

2. 『アリス』とマクタガートの時間論

本節では、前節で生じた疑問「ティー・パーティにおける時間のパラドクスとは何か」について検討する。ティー・パーティで止まった時間とは何であるのか。それは帽子屋と三月ウサギの「狂気」ゆえのでたらめであるのであろうか。しかしながら、これはたんに「狂気」として片付けてよいものではない。哲学では、これはパラドクスとして扱われてきた。ゼノンの飛ぶ矢のパラドクスでは各瞬間の矢の静止が指摘され、分割のパラドクスではいつまでも的に到達しない矢についての言及がなされ、アキレスと亀のパラドクスでは決して亀に追いつくことのできないアキレスが提示される。以上の3つのパラドクスにおいて、進むことができずに時間が止まってしまっている状態が現れる。しかし、動きが停止しているわけではない。これらはすべて論理の上での状態である。つまり、論理によって時間が止まっているのである。確かに論理は、私たちが正しく思考するための道具である。ゆえにその論理によって、流れているはずの時間が止まってしまうということは、とても奇妙に思われる。しかしながら、それは「狂気」であるとして流してしまえるようなものでもない。

マクタガート¹²は1908年に発表された「時間の非実在性」という論文において、このような論理と時間の関係を論理的に時間が実在しないことを証明するというかたちで表した。「時間は実在しない」という結論を導きだしたマクタガートの議論は、数多くの批判があるものの、時間論そのものの不明瞭さや、問題の変質を伴いつつ、現在も

なお議論の対象となっている¹³。このようなマクタガートの議論についてダメットは擁護論を展開し、マクタガートが訴えているのは、「時間の非実在性」よりもむしろ、「実在の完全な描写が存在しなければならぬ」という私たちがもつ前提の過ちであるとする¹⁴。すなわち、ダメットはマクタガートの時間論を「論理的に時間を解明しよう」とすると矛盾が立ち表れる」といったパラドクスであるとみなしている¹⁵。『アリス』は論理学者キャロルの描いた論理の限界の提示であり、マクタガートもまた論理的に時間を否定することによって論理の限界を提示した。確かに、『アリス』と40年以上もの隔たりのあるマクタガートの議論とが関連づけて語られることはほとんどない。だが、マクタガートの時間論にもとづけば、私たちは帽子屋と三月ウサギの止まった時間のパラドクスの形式をたんに「狂気」として退けるのではなく、より積極的に捉えることができるように思われる。以下ではマクタガートの時間論を概観し、その議論にもとづいて帽子屋と三月ウサギをめぐる時間のパラドクスを検討していくこととする。

2-1. マクタガートの時間論

マクタガートの議論については、入不二（2002）が適切にまとめているので、入不二に従ってみたいことにする。マクタガートは、時間を2種類に分類し、「現在」という視点に依存する時間をA系列、視点に依存しない客観的な時間をB系列と呼ぶ。A系列は「過去-現在-未来」による動的な時間把握であり、「いま～である」という主観的な視点の形をとる。B系列は時間的な前・後による静的な時間把握である。それは例えば、「1832年にキャロルが生まれた」、「1865年に『不思議の国のアリス』が出版された」、「1871年に『鏡の国のアリス』が出版された」という客観的な歴史記述の形で表される。A系列は「いまここ」に焦点をあてた主観に依存した記述であるために、「～である」ことの前（いままで・これまで）から後（これから）への移行関係、つまり、時間的な変化を内在している。しかしB系列は客観的な視点であり、変化のない時間的な順序関係である。加えて、C系列と呼ばれる無時間的な順序／秩序が存在する。それは例えるなら、アルファベットや数字のような、直線上の点としての順序である。たんなる順序であるC系列に動的な時間性（過去⇒現在⇒未来）を有したA系列を組みあわせることで、B系列（時間的順序関係）が成り立つ¹⁶。

$$C \text{ 系列} + A \text{ 系列} = B \text{ 系列}^{17}$$

$$\text{無時間的な順序} + \text{時間的な変化} = \text{時間的な順序関係}^{18}$$

マクタガートはその時間論において、時間にとっては変化が本質的であるが、B系列だけでは変化を説明することができず、それゆえ、時間にとって本質的なのはA系列であるとした。しかし、A系列に含まれている「過去」「現在」「未来」という特性（=A特性）は、そのそれぞれが両立することが不可能なものであるにもかかわらず、「いまここ」という点が常に変動していくものであるために、出来事はそれら3つの特性をすべて持っていないことになる。

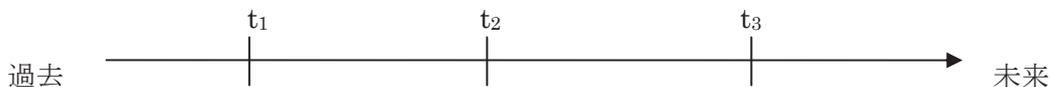


図 1

もし1つの出来事Eが過去のこと（ t_1 に位置する点）であるならば、それはかつての現在や未来（ t_2 や t_3 に位置していた）であり、もしそれが未来のこと（ t_3 に位置する点）であるならば、それはこれからの現在や過去（ t_2 や t_1 ）となり、もしそれが現在のこと（ t_2 に位置する点）であるならば、それはかつて未来（ t_3 ）であり、これから過去（ t_1 ）となるからである。つまり、A系列の時間において、出来事Eには「過去」「現在」「未来」が両立しているが、それら3つは互いに相反する関係の性質であるために、両立不可能である。というのも、A系列の時間は変化を内在

するものとして規定されているが、その変化を表すために「過去」「現在」「未来」の3つをそれぞれ互いに排他的に独立したものとして考えなければならないからである。このことは、A系列そのものが矛盾していることを示している¹⁹。そして、A系列が矛盾しているということによって、B系列の時間も否定され、「時間は存在しえない」ものとなる。そのことから最終的には、「時間は非実在的である」という結論が導かれるのである²⁰。

以上のようにして、マクタガートは時間の実在を論理によって否定した。さらに、マクタガートのこの証明において、A系列の矛盾を回避しようとする、無限退行が生じる。次に、マクタガートの証明に含まれる無限退行の構造について説明しよう。

2-2. マクタガートの証明に含まれる無限退行

まず、A系列の議論に対して次のように反論したとしよう。「出来事Eは、はじめは未来(t_3)であったものが、次に現在(t_2)となり、やがて過去(t_1)になるだろう」というように、継起的に3つのA特性「過去」「現在」「未来」をもつのであって、同時にそれらの特性をもつわけではないのだから、ここに矛盾はない。つまり、出来事Eは「過去になるだろう」「現在である」「未来であった」となるはずである。このとき、「過去になるだろう」は「未来において過去である」へと、「現在である」は「現在において現在である」へと、「未来であった」は「過去において未来である」と書き換えることができる。つまり、3つのA特性(第1レベル)が継起的に成り立つということは、この3つの特性に既に「過去」「現在」「未来」という時間的観点が含まれているということである。よって、3つの特性と3つの時間的観点の組み合わせで合計9つの特性(第2レベル)が存在することになる。この第2レベルにおける3つの特性「現在において過去」「現在において現在」「現在において未来」は、第1レベルの特性「過去」「現在」「未来」と等しい。つまり、第2レベルにおいてもやはり、両立不可能なA特性をもつことになり、矛盾が生じる。同様の応酬が無限に続くが、第nレベルの「現在における……現在において過去/現在/未来」は第1レベルの「過去」「現在」「未来」に等しい。したがって、どのレベルにおいても両立不可能なA特性をもつことは変わらず、A系列は矛盾を回避することができない。こうして、矛盾を回避しようとする試みが、次のレベルでの矛盾を生み、無限のレベルを形成していくことをマクタガートは指摘する²¹。

帽子屋と三月ウサギにおける「時間を殺す=時間を止める」とは、時間が経過しなくなるということであり、過去から現在、現在から未来へという変化がないということである。それはすなわち、マクタガートにおけるA系列の消去であると考えられる。彼らがA系列を消去した後に残るのは、たんなる秩序としてのC系列のみであるはずだ。つまり、帽子屋と三月ウサギにとってのティー・タイムとは、「過去」「現在」「未来」という時間性のない直線なのである。そのため、常にティー・タイムであり、それ以前もそれ以後の時間もない帽子屋と三月ウサギには、汚れた茶器を洗う間もなく、テーブルに並べた茶器の間を、席をずらして順にまわる。それに対する「はじめの席に戻るとどうなるの」というアリスの問いは考えることが許されない。時間性のない無限直線の上で、次の段階へと進むことを考えること自体が不可能なのである。それはしかし、ゼノンのパラドクスと同じく論理の上でのみ可能なことであり、世界を記述する道具としての論理の限界である。『アリス』の帽子屋と三月ウサギの描写は、「論理的に時間を解明しようとする」と矛盾が立ち表れる」というマクタガートの議論を40年以上も先取りしていたのだといえるだろう。

3. 『アリス』とドゥルーズの時間論

次にもうひとつの疑問について検討しよう。それは、止まった時間の上で動いている帽子屋と三月ウサギとは、それを可能にする「狂気」とは、何であるのか、という疑問である。ドゥルーズは、『意味の論理学』(1969)において、『アリス』を主題として扱っているが、その中でパラドクスを表すものとして、帽子屋と三月ウサギを挙げ、狂気について論じている。ドゥルーズは、帽子屋と三月ウサギをパラドクス=狂気・生成の、1回で2方向を肯定し、常に現在を逃れる無限同一性とみなし、帽子屋と三月ウサギの生きる時間をアイオーンの時間として読む。

[引用者注:生成-狂気の1回で2つの意味=方向(sens)を表すものとして、]『不思議の国のアリス』の中で、

まず、帽子屋と三月ウサギがいる。帽子屋と三月ウサギのそれぞれは1つの方角=方向 (direction) に住むが、しかし2つの方角=方向は不可分であり、それぞれの方角がもう一方の方角へと再分割される。その結果、人(読者)はそれぞれの方角において帽子屋と三月ウサギの2者ともに出会う。狂人であるためには2人でなければならず、人は常に2人で狂人である。彼らが (il ont) ²²「時間を台なしにした」日に、彼らは2者とも狂人となった。すなわち、尺度 (mesure) を破壊し、特質を固定的な何かに結びつける停止 (arrêt) と静止 (repos) を削除した日に狂人となった。帽子屋と三月ウサギは現在を殺した。その現在は、彼らの間では、彼らの苦しめられた仲間であるヤマネの眠ったイメージの中でしかもはや生き残らない。しかしまた、[現在は] 抽象的瞬間、つまり無際限に過去と未来に再分割可能なティー・タイムにおいてでしか、もはや存続しないのである。こうして、いまや彼らはたえず位置を変え続ける。それは、常に遅れ、常に進んで、1回で2つの方角=方向に、しかし、決して時間どおりにはならない。鏡のもう1つの側で、ウサギと帽子屋は2人の使者のなかで焼き直される。それは、アイオーンの同時的な2つの方角=方向に応じて、一方は往路用で、他方は復路用であり、また一方は探索用で、他方は報告用である (Deleuze 1969, Douzième série sur le paradoxe, pp.97-98)。

先述したチェシャ・ネコがアリスに示すように、帽子屋と三月ウサギは異なる2方向に住んでいる²³。アリスは三月ウサギの住む方へ行く道を選ぶが、その先では帽子屋と三月ウサギとヤマネ(眠りネズミ)の3者がティー・パーティを開いており、アリスは結局、帽子屋と三月ウサギの両者に会うことになる。彼らは常に2人で現れる。『鏡の国』において帽子屋と三月ウサギは、ヘア (Haigha = March Hare) とハッタ (Hatta = Mad Hatter) という白の王の2人の使者として再び現れる²⁴。彼ら2者は同時に狂い、同じ方向でみいだされ、2人いなければ使者として成り立たない。『鏡の国』においても、帽子屋(ハッタ)は片手にティー・カップ、もう一方の手にバタつきパンを持って登場する。『不思議の国』の最後の裁判の後から、『鏡の国』で釈放されたばかりの身として出てきてもなお、帽子屋の時間はティー・タイムで止まったままである²⁵。ではそのとき、「狂気」はどのように理解することが可能であるのか。檜垣(2010)によるドゥルーズの時間論とそれに関わるパラドクス論を参照しながら、それをみていこう。

3-1. ドゥルーズの時間論

『意味の論理学』においてドゥルーズは、クロノス(時間)とアイオーン(永遠)という概念を用いる。クロノスとは、現在の時間、唯一実在する現在であり、過去や未来を自己が向かう2つの次元とする現在である。それは、経験可能な時間としての現在であり、主体の経験する時間である。それに対し、アイオーンは、永遠の時間、抽象的瞬間=契機の無限再分割における過去-未来であり、視点なき俯瞰、無限的、直線的な順序の時間である。これは、経験不可能な無限の時間であり、主体の経験には入り込めない形式としての永遠である²⁶。アイオーンにおいて、「現在」は完全には実現することのない永遠の時間である。アイオーンでは、過去と未来だけが時間において存立し存続する。アイオーンは、常に現在から逃れながら、同時に2つの意味=方向にたえず分解される。過去と未来を吸収する現在に代わって、未来と過去が、各瞬間に現在を分割し、過去と未来へ、1回で2方向に、現在を無限に再分割する。あるいは、相互に未来と過去を包含する広大で厚みのある現在に代わって、厚みも延長もない瞬間が、各現在を過去と未来に再分割する。アイオーンは、2方向に限界なく、直線的に延びていく。アイオーンは、常に既に過ぎ去り、永遠に未だ来るべきもので、時間の永遠真理であり、空虚な純粹形態である²⁷。アイオーンの間は経験不可能であり、そのかぎり、「超越論的に」経験される²⁸。このようなアイオーンの間は、狂気-生成のパラドクスに深く関係している。

ドゥルーズの時間論において、クロノスという現在の方向づけられた線とアイオーンの線は対比的に配置される。そこでは、視点としての現在=生ける現在(クロノス)と順序の時間=無限の俯瞰(アイオーン)がベルクソンの論じる記憶=過去の潜在性の時間を媒介として、パラドクスのように連関している。現在という定点をもちながら、それ自身がそうした定点性を解消させる無限の直線を含み込んでしまうのである²⁹。

3-2. ドゥルーズのパラドクス

ドゥルーズにおいて、パラドクスは、常に現在を逃れて、1回で2方向=意味を肯定し、無限同一性であるとされ

る。パラドクスは、ドクサ (doxa) = 意見に対立する。つまりは、唯一無比の方向としての善き方向 = 意味、すなわち、良識を破壊するものであり、固定的同一性を割り当てる常識 = 共通意味 = 共通方向を破壊するものである³⁰。

ドゥルーズは、これらのパラドクスの性質が『アリス』において随所に表れるとする。例えば、常に1回で2方向へいくことは、アリスが同時に大きく、また小さくなること³¹として読み取られる。また、常に現在を逃れる性質は、白の女王のことは「前日と翌日のジャムで、決して今日ではない」³²に表れる。さらに、無限同一性は、5つの夜は1つの夜より5倍暖かいが、同じ理由で5倍寒いこと³³における多と少の逆転として、アリスの「ネコはコウモリを食べるのか」と「コウモリはネコを食べるのか」の混同³⁴における能動と受動の逆転として、あるいは罪を犯す前に罰せられること³⁵、指をピンで刺す前に泣き叫ぶこと³⁶、切り分ける前に配ること³⁷における原因と結果の逆転として表れる³⁸。

このパラドクスは、2つに分類される。1つは意義 = 意味作用 (signification) のパラドクス、もう1つは意味 (sens) のパラドクスである。意義 = 意味作用のパラドクスは、本質的には、異常な集合 (自己を要素として含む集合や異なるタイプの要素を含む集合) と反抗的な要素 (その実在を前提とする集合の部分で、それ自身が決定する2つの下位-集合に属する要素) である。ここには、有限的なもの (意義として現実化された意味) から無限的なもの (出来事としての意味) を把握することのパラドクス性がある。このパラドクスにおいては、言語がパラドクスの受難によってより高い力能に達する。キャロルの「カバン語」(1つの語に2つ以上の意味をもたせた語) などがこれにあたる³⁹。これに対して、意味のパラドクスは、本質的には、無限再分割 (常に過去-未来で決して現在でない) とノマダ的分配 (閉じた空間を分配するのではなく、開いた空間の中で分配される) である⁴⁰。ここでは、無-意味による意味の贈与が行われる。このパラドクスは、無限再分割によって、流れがそれ自身のうちの無限を含意することを明らかにする。すなわち、無限性そのものもつパラドクス性を示す⁴¹。

これらのパラドクスの特徴は、1回で2方向 = 意味へ行くことと、同定を不可能にすることである。この特徴は、『アリス』における生成-狂気と名前-喪失の2重の冒険に読み取られる⁴²。意義のパラドクスは、論理的な言語的階層性と自己言及性のパラドクスであり、無限退行のパラドクスである。対して、意味のパラドクスは無-意味そのもののパラドクスとなる。意義のパラドクスから意味のパラドクスへの移行は、アリスのウサギ穴への落下に象徴されるような、高所から深層への移行である⁴³。こうしたパラドクスの要素は無-意味であるが、しかしまさにその無-意味が意味を生み出すのである⁴⁴。

帽子屋と三月ウサギの殺した「現在」とは、クロノスであり、クロノスとしての時間を消去したその後に残るのは、アイオンとしての時間となる。アイオンの時間に生きる彼ら2人の「狂気」は、未だ犯していない罪によって罰せられていた監獄から釈放された時になお、片手にティー・カップ、片手にバタつきパンをもつことによってティー・タイムを継続させるような空虚な形式としての行為の連鎖に表れている。彼らが生きているのは、形式的なアイオンの空虚で無-意味な時間であり、彼らは「狂気」=パラドクスによってその無-意味に「ティー・タイム」という意味を与えることになるのである。

4. 『アリス』における帽子屋と三月ウサギの時間

ここまで帽子屋と三月ウサギの時間のパラドクスとはどういうものか、帽子屋と三月ウサギの存在とは、「狂気」とはなんであるのか、という2つの問いに対し、マクタガートとドゥルーズという、まったく異なった位置からの2つの時間論によって答えをみいだそうとしてきた。マクタガートによって、帽子屋と三月ウサギの止まった時間とは「過去」「現在」「未来」のない秩序そのものとしてのC系列であり、そのパラドクスが論理の限界の提示としてあることがみてとれた。ドゥルーズにおいては、帽子屋と三月ウサギの時間はアイオンであり、空虚な形式としての彼らの「狂気」がパラドクスとして意味を生成する。これら2つの時間論を結びつけることは容易ではないが、檜垣はこれら2者の議論をあえて結びつけて捉え、その類似性を論じている。

檜垣は、マクタガートの順序と時間性を組みあわせた時間的な順序であるB系列と、ドゥルーズの時間の無限的で直線的な順序の時間であるアイオンに類似性をみだし、マクタガートのB系列の構造を、ドゥルーズの時間論の中に読み込もうとした。しかし、ドゥルーズにおいて、主体の経験する時間 = 経験可能な時間としての現在 (ク

ロノス)と主体の経験は入り込めない形式としての永遠=経験不可能な無限の時間(アイオン)がパラドクスのな連関によって示されること、すなわち、主体の生ける時間が絶対的順序性としての無限の俯瞰を織り込むことによって可能になっている。一方で、B系列における順序性は、それを語る以上は時間を俯瞰的にみいだす観察者が想定されるものの、マクタガートにおいては、順序性はたんなる論理的構成物としてしか捉えられないために、観察者の存在は無視される。それに対して、ドゥルーズにおける時間の順序性は、現前でない実在であり、決して論理的構成物ではない。このことから、檜垣はマクタガートの議論とドゥルーズの時間論は、類似してはいても同一のものではなく、やはり互いに直接関わるものではないのだと結論づける。その上で檜垣は、マクタガートのB系列に対して、論理的構成物の水準のみで思考するのではなく、現在の視点に依拠しないものの時間が在ることを可能にする時間を、経験されない仕方ですべて生きてしまうような場面を想定することを提案している⁴⁵。檜垣はB系列に含まれるC系列がたんなる論理的構成物であるとして退けるが、論理的構成物としての順序とは、存在はしていないものの、真理・法則のような成立しているコトとして実在するものであると考えられる⁴⁶。

しかし、これまでみてきたように、帽子屋と三月ウサギの時間とは、マクタガートにおけるC系列であり、ドゥルーズにおけるアイオンであった。そのことから、何らかの類似性は、B系列とアイオンではなく、C系列とアイオンにあると考えるほうがより正確であるかもしれない。だが、C系列はそもそも無時間的な概念であり、1つの時間としてのアイオンと比較することは無意味である。しかしながら、檜垣の理論に沿って現在と無限直線のパラドクスの連関のうちに帽子屋と三月ウサギの時間を解釈するならば、帽子屋と三月ウサギという存在の特殊性をよりわかり易いかたちで表現することができる。帽子屋と三月ウサギは、アイオンの時間の中でさまよい、誰にも経験されない時間を生きていることになる。すなわち、実在している者は誰も経験しえない経験を、帽子屋と三月ウサギは「狂気」によって実現してしまっている。『アリス』において帽子屋と三月ウサギは、たんなる登場人物では決してない、超越論的な存在となっているのである。

注

- 1 Sewell 1952=1980、および高橋 1977 を参考にした。
- 2 宗宮 2001, pp. 5-51.
- 3 宗宮 2001, pp. 102-23.
- 4 Carroll 2005, pp. 93-4.
- 5 Carroll 2006, pp. 84-5.
- 6 Carroll 2006, pp. 113-38. 宗宮は、名辞論理の体現者として、ハンブティ・ダンブティを詳細に解説している(宗宮 2001)。
- 7 Carroll 2006, pp. 81-2.
- 8 Carroll 2005, pp. 95-111. (第7章)、およびCarroll 2006, pp. 139-58. (第7章)に登場する。
- 9 チェシャ・ネコは以下のように言っている。“we’re all mad here. I’m mad. You’re mad.”「ここでは私たちはみな狂っている。私は狂っている。あなたも狂っている。」(Carroll 2005, p. 90.)しかし、文章中において明確に「狂気(mad)」であると書かれるのは、帽子屋と三月ウサギだけである。また、彼ら自身が「帽子屋のように狂った」「三月ウサギのように狂った」という慣用句から生みだされたキャラクターであり、狂気そのものの代名詞から生まれた存在となっている。
- 10 “Well, I’d hardly finished the first verse,” said the Hatter, “when the Queen bawled out ‘He’s murdering the time! Off with his head!’”
“How dreadfully savage!” exclaimed Alice.
“And ever since that,” the Hatter went on in a mournful tone, “he won’t do a thing I ask! It’s always six o’clock now.”
「ところで、私が第一節を満足に終えないうちに」と帽子屋はいった。「女王は叫んだ、『彼は時間を殺している!彼の首をはねろ!』」
「なんておそろしく野蛮なの!」とアリスは声をあげた。
「そしてそれ以来ずっと」と帽子屋は悲しみに沈んだ調子でつぶやいた。「彼は、私が頼むことをやろうとしない!いまではいつも6時だ」
(Carroll 2005, p. 104.)
- 11 歌ったのは、「きらきら星」の替え歌で、「きらきらこうもり」。
- 12 マクタガート自身は、『アリス』の挿絵画家テニエルの描いたヤマネ(ティー・パーティにおいて、帽子屋と三月ウサギの間で眠っている。眠りネズミ。)に似ているといわれ、「トリニティの狂気のティー・パーティ(Mad Tea-Party of Trinity)」のひとりとして有名であったとされる。テニエルの描いた帽子屋と三月ウサギ、ヤマネは、後に、それぞれケンブリッジのラッセル(1872-1970)、ムーア

- (1873-1958)、そして、マクタガート (1866-1925) に似ていると指摘され、3人は「トリニティの狂気のティー・パーティー (Mad Tea-Party of Trinity)」と呼ばれていた (Gardner 1970=1980a, p. 102)。
- 13 ホーウィッチは、マクタガートは「動くいま」という考え方が成立しない、ということの証明には成功したが、時間が非実在的であることの証明には成功していないとする (Horwich 1987=1992, p. 41)。入不二は、マクタガートが証明しているのは、「時間の非実在性」ではなく、「時間はそもそもレベルの落差の反復として存在する」ということであるとする (入不二 2001, pp. 97-102)。また、入不二はこのマクタガートの議論には時間の変化・動性と記述的固定・静性の矛盾関係、絶対的現在と相対的現在の矛盾関係、時間の変化・動性と絶対的現在の矛盾関係の3つの矛盾関係が含まれるとする (入不二 2007, pp. 110-8)。青山は、マクタガートにおける時制的变化の定義における問題を提起した。マクタガートの洞察は、性質的变化の背景に時制的变化をみいだすことであり、マクタガートの失敗は、性質的变化のアナロジーがもつ限界を意識しないまま、そのアナロジーの語彙を用いて定義を試みた点にあるとしている (青山 2004, p. 67)。郡司は、マクタガートにおける矛盾の原因は、B系列上をA系列が移動するという描像が、B系列において指定される現在 (点としての現在) とA系列における現在 (集合としての現在) とがまったく異なる概念であるにもかかわらず、両者の混同が不可避となる点にあるとする (郡司 2008, p. 131)。
- 14 Dummett 1960=1986, p. 380.
- 15 郡司 2008, p. 124.
- 16 入不二 2002, pp. 60-107 参照。
- 17 入不二 2002, p. 102.
- 18 同上。
- 19 入不二 2002, pp. 120-4 参照。
- 20 「時間が実在的 (real) であるとするれば、それは時間が存在する (exist) という仕方によってのみである」という前提による。詳細は入不二 2002, pp. 113-7 参照。
- 21 Dummett 1960=1986, pp. 371-372; 入不二 2001, pp. 90-6.
- 22 邦訳では *il ont* を *ils ont* と読んで訳されているが、『アリス』作品中で実際に「時間を台なしにした」といわれたのは帽子屋であるため、ドゥルーズはわざと帽子屋のみを指す *il* を表記し、2者の狂人性を示すために動詞を複数形で表記したようにも思われる。
- 23 “In that direction,” the Cat said, waving its right paw round, “lives a Hatter: and in that direction,” waving the other paw, “lives a March Hare. Visit either you like: they're both mad.”
「その方角には」と、ネコは右の前足を回して言った。「帽子屋が住んでいる。そして、その方角には」と、もう一方の前足を回して、「三月ウサギが住んでいる。どちらか好きな方を訪ねなさい。両方とも狂っている」(Carroll 2005, p. 90.)。
- 24 白の王はいう。“I must have two, you know—to come and go. One to come, and one to go.”「私には2人必要だ——来るのと行くのと。ひとは来る用、ひとは行き用」(Carroll 2006, p. 143.)。
- 25 ヘイア (三月ウサギ) がアリスにこう教えている。“He's only just out of prison, and he hadn't finished his tea when he was sent in.”「彼は牢屋を出てきたばかりで、送られたとき、彼はお茶を終えていなかったんだ」(Carroll 2006, p. 148.) と。
- 26 檜垣 2010, pp. 4-22.
- 27 Deleuze 1969=2007, p. 288.
- 28 檜垣 2010, p. 10.
- 29 同上。
- 30 Deleuze 1969=2007, pp. 15-9.
- 31 『不思議の国のアリス』における、アリスの拡大と縮小のことを示す。ドゥルーズは述べる。「もちろん、アリスがより大きいこととアリスがより小さいことは、同時ではない。しかし、アリスがより大きくなることとアリスがより小さくなることは、同時である。アリスはいまは、より大きい。アリスは以前は、より小さかった。しかし、より大になることと、より小となることは、同時に一挙にである」(Deleuze 1969, p. 9)。
- 32 Carroll 2006, p. 94.
- 33 同じく、pp. 196-7.
- 34 Carroll 2005, p. 6.
- 35 Carroll 2006, p. 95. 白の女王による使者 (帽子屋) の話。
- 36 同、pp. 97-8. 白の女王の行動。
- 37 同、pp. 156-7. 鏡の国の菓子の扱い方。
- 38 Deleuze 1969=2007, p. 18.
- 39 Deleuze 1969=2007, p. 140; 檜垣 2010, pp. 163-5.
- 40 Deleuze 1969=2007, p. 140.

- 41 檜垣 2010, pp. 165-7.
- 42 Deleuze 1969=2007, p. 140.
- 43 檜垣 2010, pp. 163-7.
- 44 Deleuze 1969=2007, pp. 149-51.
- 45 檜垣 2010, pp. 10-3.
- 46 入不二 2002, pp. 113-7.

参考文献

- 青山拓央「時制的变化は定義可能か——マクタガートの洞察と失敗」『科学哲学』37-2, pp.59-70, 2004.
- Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland*, Macmillan, 2005 ('1865). (= 生野幸吉訳『ふしぎの国のアリス』福音館書店, 1971.)
- . *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*, Macmillan, 2006 ('1871). (= 生野幸吉訳『鏡の国のアリス』福音館書店, 1972.)
- Deleuze, Gilles. *Logique du sens*, Les Éditions de Minuit, 1969. (= 小泉義之訳『意味の論理学 上・下』河出文庫, 2007.)
- Dummett, Michael. "A Defence of McTaggart's Proof of the Unreality of Time", *Philosophical Review*, 69, pp.497-504, 1960. (= 藤田晋吾訳「マクタガートの時間の非実在証明を擁護して」, 『真理という謎』 pp.370-81, 1986.)
- Gardner, Martin (ed.). *The Annotated Alice*, Penguin Books, 1970. (= マーチン・ガードナー注, 石川澄子訳『不思議の国のアリス』東京図書, 1980a. / 高山宏訳『鏡の国のアリス』東京図書, 1980b.)
- 郡司ベギオー幸夫『時間の正体——デジャブ・因果論・量子論』講談社選書メチエ, 2008.
- 檜垣立哉『瞬間と永遠——ジル・ドゥルーズの時間論』岩波書店, 2010.
- Horwich, Paul. *Asymmetries in Time*, MIT Press, 1987. (= 丹治信治訳『時間に向きはあるか』丸善株式会社, 1992.)
- 入不二基義『相対主義の極北』春秋社, 2001.
- 『時間は実在するか』講談社現代新書, 2002.
- 『時間と絶対と相対と——運命論から何を読み取るべきか』勁草書房, 2007.
- McTaggart, J. M. E. "The Unreality of Time", *Mind*, vol. 17, no. 68, pp. 457-74, 1908.
- Sewell, Elizabeth. *The Field of Nonsense*, Chatto and Windus, 1952. (= 高山宏訳『ノンセンスの領域』河出書房新社, 1980.)
- 宗宮喜代子『ルイス・キャロルの意味論』大修館書店, 2001.
- 高橋康也『ノンセンス大全』晶文社, 1977.

The Mad Hatter and the March Hare: An Interpretation of Alice's Paradox Using the Time Theories of McTaggart and Deleuze

KADOTA Asana

Abstract:

Lewis Carroll's Alice stories contain many paradoxes, including the paradox of the Mad Hatter and the March Hare, who are both synonymous with madness, and whose madness is subjected to time. This paper aims to interpret Alice's paradox using two time theories, those of McTaggart and Deleuze. McTaggart logically explains the unreality of time with two concepts, the A series, in which positions run from the past to the present, and then from the present to the future, and the B series, in which positions are ordered from earlier to later. Deleuze explains time as the paradoxical relationship of Chronos (a limited present) and Aion (an unlimited future/past). Looking at these differing time theories, Higaki finds a similarity between McTaggart's B series and Deleuze's Aion, and argues that both represent time impossible to be experienced by real entities (Higaki 2010). This is the time in which Alice's Mad Hatter and March Hare live: they use their madness to realize the experience of living in an experience that no real entities can experience.

Keywords: Alice, paradox, time theory, McTaggart, Deleuze

『アリス』のパラドクス解釈の試み ——マクタガートとドゥルーズの時間論を中心に——

角 田 あさな

要旨:

本稿はルイス・キャロルの『アリス』作品におけるパラドクス、なかでも帽子屋と三月ウサギの時間のパラドクスをマクタガートとドゥルーズという2つの異なる時間論から読み解こうとするものである。2つの時間論の検討は、止まった時間のパラドクス＝「狂気」を体現する帽子屋と三月ウサギの存在が何を指すのか、そのパラドクスの構造を知るための手がかりとして用いる。マクタガートとドゥルーズ、それぞれの時間論からの、2方向の『アリス』解釈を試みる。全く異なる方向性をもつ2つの議論だが、檜垣(2010)はマクタガートの議論をドゥルーズのクロノス(現在)とアイオン(無限直線)のパラドクスの連関の時間論の中に読み込もうとする。そのことから、帽子屋と三月ウサギはドゥルーズのアイオンの時間の中でさまよい、実在している者は誰も経験しえない経験を生きることを、「狂気」によって実現してしまっているのだと解釈することができる。